子供が家で勉強するようになるには、豊かな土壌が必要です。

豊かな土壌とは

～肥えていない土では植物は育ちません～

中川祐樹

はじめに

私は、優喜塾という進学塾を経営しています。
お預かりした子供達の能力を引き出すために、日々指導にあたっています。

多くの子供たちが、ある日、目が輝き、驚くほど学力を伸ばしていきます。
感動の毎日です。

高校を中退し、約２年間、家に引きこもっていた子供が、優喜塾で、わずか８ヶ月間で超難関大学に合格するまでの全てを私は知っています。
また、学年で１００点満点中わずか３０点位の成績だった子供が、有名進学高に奇跡的に合格した現場にも立ち会いました。

他にも、なにかのきっかけで目を疑うような成績の伸びをした生徒を数えきれないほど眼前で見てきました。

私は、考えました。

なぜ、同じ指導をしているのに、成績が大きく伸びる子とそうでない子供がいるのかを。

そうして、私は、ひとつの答えにたどり着きました。

それは、成績を大きく伸ばす子供達には、共通点があったということです。

その共通点とは・・・

１．期待

子供の能力は小学１年生で分かります。誤解を恐れず言えば、小学１年生時点での学力をじかにみることによって、どの高校に、そしてどの大学に合格するか私は判断できます。
ですから、過度の期待をお子様にかけるのは極力控えるべきでしょう。
大事なのは、勉強を通して、お子様に「集中力」「継続力」「問題解決能力」「困難にぶつかったときの乗り越え方」を身につけさせることです。
そして、よい土壌をお子様に与えることに気持ちを注いでください。
「いや、それはきれいごとだ。世の中、やっぱり有名高校に合格したほうが有利なのだ。だから現実的に志望校に合格するための勉強をさせるべきだ。その中で集中力なども自然と養われるのではないか」と思われる方

もいらっしゃるでしょう。

それにお答えします。
もしお子様が勉強ができるタイプならば、そのお考えでいいと思います。私も、同意見です。
勉強ができるタイプとは、学年で上位１割から２割に入るお子様のことです。
勉強ができる子には、私もどんどん志望校を目指させます。

しかし、勉強がそこまで得意でない子はどうでしょうか？
そのような子には、最初から志望校をほのめかしたり、成績を伸ばすことにあせるべきではないでしょう。
「うちの子は、家で勉強しないから、成績が悪いのだろう」
それは違います。
成績がいい子供たちはあまり家で勉強しません。それでも点数はいいのです。
努力と結果が**比例しない**。
そのことは、お母様方も当然ご存知だと思います。
しかし、自分の子供のこととなると、そのことを忘れてしまうものです。
ですから、**その現実をまずは、お母様方が受け入れてください**。
　なぜ、私がこのような話をするかと言えば、勉強ができる子は、はっきり言って、ほうっておいてもいいのです。彼らは、学校の授業中、友達と話していたりしても、彼らは授業の要点をしっかりと理解します。
私たちが、真剣に考えなければならないのは、高校受験が過熱しすぎている昨今、その犠牲（こう呼んでもいいでしょう）になっている**８割近くの子供たち**のことなのです。

　学校の授業についていけるのは全体の２割程度です。
そのほかの８割の生徒達は、程度の差はあれ、十分に理解することができていません。その理解していない部分が積み重なり、徐々に学習意欲を低下させるのです。
もし、勉強が得意なら、家でもよろこんで勉強するでしょう。

「〇〇ちゃんは、家であれだけ勉強するから、成績がトップクラスなんだね」
これは違います。
「成績がトップクラスで日々プラスのイメージばかり受けることができるから、家で勉強する気になれる」のです。

　学校のテストもみんなより悪い、塾でもついていけていない、
それを毎日体験しているお子様の気持ちを考えていく必要が私たちにはあります。
毎日毎日、家でも、「勉強したの？」の連続。
頑張ってもなかなかうまくいかないから勉強しないのです。

まずは、お子様がいちばんしんどいんだということを考えてあげ、先ほど述べました**「よい土壌」**を与えることに専念することからはじめていきたいものです。

その、**「よい土壌」**とは、どのようなものかにつきましては、本書の第７章に詳しく書いておりますので、そちらを参考にしてください。

２．見栄・世間体

　だれでも、してはいけないと分かっていながら、お子様を他の子供と**比較**してしまいます。そして不安になりあせります。
そして、塾に通わせてなんとか成績の向上を望みます。
この塾で伸びなかったら、あっちの塾。それでもだめなら、家庭教師、個別指導・・・
振り回される子供たち。
この現象は、「ある程度」勉強ができているお子様をお持ちのご家庭に多いと感じています。ありとあらゆる広告や情報にお母様方自身が振り回されて、不安になってしまうのです。特に受験が迫ってくると、その現象は顕著になります。これをさせないと、あれをさせておかないと・・・と不安が高じるのです。
　しかし、話は大きくなりますが、なにかの原因を外に求める親御さんに育てられたお子様は、そのお母様方の態度・行動をモデルとして学習しますので、将来、仕事や結婚生活で問題にぶつかると、問題解決よりも、現実から逃避したり、環境自体を変えようとします。つまり、例えば仕事で嫌なことがあったら「自分には向いていない」といって安易に辞めてしまったりするのです。
それは、お母様方が望んでいることではないはずです。

　いずれにしても、今の学校の先生はうちの子に合っていないのではないか、この塾はうちの子に適していないのではないか、この問題集ではなく、あの問題集をさせたほうがいいのだろうか、などと考えることは、もしそれがお母様方の不安が根底にあることから発するお考えであるのならば、お子様の為にお勧めできません。

ですから、勉強の壁にぶつかったときは、安易に状況を変えるのではなく、学校の先生でもいいですし、塾の先生でもいいので、まずはじっくりと話し合いを持つことを強くお勧めします。

つい成績表をみて不安になり、
「勉強しなさい」
「なにこの成績は？」
といってしまうものですが、
そうではなく、優しく
「勉強の調子はどう？」

位でおさえてください。

つまり、お母様自身が、お子様の成績の事やいろいろなお母様レベルの情報に悩まれ、不安になっていたのでは、それがお子様にも伝わり、子ども自身も不安になって、ゆらゆらとした気持ちを持つことにもなりかねません。

　お子様が小さかった頃の事を思い出してください。
なかなか夜寝ない。こっちがいらいらしているのが伝わり、余計に子供は眠れません。
それと同じで、お子さんは、お母様の本心をきちんと見抜いています。
自我が芽生える思春期で、反抗的になる時期のお子様であればなおさらです。
周りの子供との比較によって生じるお母様がの不安からくる「勉強しなさい」の威圧から、お子様を解放してあげてください。
無言の威圧をしている以上、お子様は勉強したいという気持ちにすらなりません。

3．塾

塾に通うだけで、成績が伸びることはありません。
それは、お母様方も十分に知っているはずです。
しかし、あまりにもお子様が家庭で勉強しないから不安になり、焦り、つい、塾に通わせれば成績が伸びると勘違いしてしまうのです。
もちろん、塾に通って成績が伸びないわけではないのですが、「塾に通ったから成績が伸びる」わけでは決してないのです。
また、さらには、塾に月謝を払っていますので、「毎月月謝を払っているのに、なんで成績が伸びないのか」とイライラしてしまうこともあるかもしれません。
しかし、その考えでは、適切な土壌を子供たちに与えることにつながりません。

もう一度、よく考えてください。
私は計算してみたのですが、塾でお子様をお預かりする時間（つまり指導させて頂ける時間）は、月の総時間において、**わずか３パーセント**程度でしかないのです。
そのわずかな時間塾に通って、机に座って塾の指導を受けたからといって、成績が伸びるわけがないのです。

「でも、お友達の〇〇ちゃんは、伸びている」と聞いている。そうおっしゃりたい方もいるでしょう。
でも、違います。
その子は、塾に通っただけで成績が伸びたのではなくて、塾でなにかしらのきっかけをもらい、意欲が向上し、本人が積極的に頑張ったから、結果として成績が伸びたのです。
ただ塾にきて、椅子にちょこんと座って、テレビでもみるように授業をうけていたのでは、成績が伸びるどこ

ろか、逆に、間違った安心感（塾に通っているから安心）を覚えてしまい、子供から「正しく学習する力」を奪ってしまいます。
それだったら、塾に通わないほうがお子様のためです。

塾の役目は、もちろん勉強を教えることだというのは私も知っていますし、実際、かなりの問題を解かせるスパルタ式を用いることもあります。
しかし、それよりも大事な塾の役目は、至極当然なことではありますが、子供に**「自信をもたせ」、「やる気を起こさせ」**ることなのです。
そして、**塾に通って成績が伸びたほとんどの生徒は、その２つを塾で経験し、前向きに地道な努力をしたからこそ成績がのびたのです**。
つまり、塾でやる気がでることだけで終わってしまってもいけません。
　塾でやる気をもらったならば、あとは家庭学習を頑張らなければなりません。ただし、塾に通うことにより**自信を持ち、やる気を向上させた生徒は、おおむね家庭学習を頑張ります**。家庭学習の時間がぐっと多くなるわけではありませんが、家での勉強にもはりがでてきて、学習内容が頭に入りやすくなるのです。それは、学校でも同じです。**自信がつき、やる気が芽生えてきた子供は、目の輝きが違ってきます**。学校の授業も、本人は意識しないかもしれませんが、積極的になり、勉強が楽しくなります。
なぜなら、自信がつくということは、成功体験を経験することとほとんど同じですから、学校でも塾でも、もっともっと成功体験をつみ、褒められたいと思うようになるのです。

　私は、塾で、その事に一番力を入れるようにしています。
お母様方も、**どうしたら子供が勉強をしてくれるかを考えるのではなく、どうしたらお子様が自信を持てるようになるか**を考えるようにして頂きたいと思っています。

４．自信

では、自信というのは、どのようにしたら子供の内面にうまれるものなのでしょうか。

ひと言で言えば「**困難にぶつけさせ、それを克服させること**」、です。
　最初は、小さな困難で構いません。子供が困難にぶつかったらそこから逃げさせてはいけません。子供が困難にぶつかったときは、子供は逃げようとしたり、親や先生の説明が分かりにくいとうったえたりと、甘える傾向がありますから、それを受け入れてはいけません。どんな場合でも、できないことの原因を外に求める人は、あまり成績が伸びません。とにかく、何度でも、子供が泣いて弱音を吐いても、その困難（例えば複雑な計算問題、つづりの長い英単語の暗記など）を乗り越えさせなければなりません。そのときは、本人がいやいやでもいいのです。とにかく、なんどもでも指導し、何度でも取り組ませ、できるまでさせる。
そしてできたとき、その時は、子供もやけくそかもしれませんが、あとあとじわじわと子供の中に「**感動**」

と**「自信」**が子供の中に現れます。
　その瞬間、もちろん、指導者は十分に褒めるべきですが、もし褒めなくても、子供は自分に自信を持ちます。ただし、注意しなければならないのは、子供に困難を乗り越えさせるとき、指導者は教えすぎないようにしなければなりません。でなければ、いくらその問題なり課題を子供がクリアできたとしても、子供は**自分が**乗り越えた気になりません。
あくまで、指導者は、やり方とコツを伝えるのに徹するべきです。

　そういった経験（成功体験）を多く積み重ねることによって初めて、子供は、やる気を芽生えさせるのです。よく、「うちの子は私が言っても勉強しないから厳しくしてください」と保護者様から言われることがありますが、そんな場合、勉強を詰め込んだり、頭ごなしに「勉強しなさい」という意味で厳しくするのではなく、基本、授業は楽しく穏やかにして、**子供が困難にぶつかってそれを乗り越えようとしないときにだけ、厳しくする**べきだと私は考えます。

ただし、先ほど言った、成績が上位２割の生徒には、ある程度厳しくしても彼らは、その厳しさの意味を知っているとまではいかなくても、多くの成功体験を積んできていますので、弱気になるよりも、「なんとしても乗り越えていこう」と自然と前向きな思考ができますので、その厳しさを自分の中でいい方向にとらえ、そしてより力をつけます。

ここで私が話題にしているのは、勉強にたいしてそれほど多く成功体験を経ていない、もしくは、ほとんど成功体験を持ったことのない生徒に関してです。
とにかく、子供に自信をつけさせるためには、**自分の力でできる！**と体験させる以外にありません。
子供が困難にぶつかりそれで苦しんでいる様子をみると、こちらも心が痛みます。例えば、自分ひとりだけ居残りになってしまった時など、また、なんど覚えても忘れてしまってパニックになっている様子を見たりするとき、私も、つい「もういいよ、今日は帰っていいよ」と言いたくなりますが、それでは、いけないのです。
それは、問題の先延ばし以外のなにものでもありません。
子供のためにならないのです。

ただし、忘れてはいけません。
基本、授業は楽しく、笑顔がでるようなものでなければなりません。
あくまで、私の塾では、楽しさ７割で厳しさ３割となるように授業をコントロールしています。

これまで、私の塾から、大きく成績を伸ばした生徒達も、今思い起こせば、全て以上のようなプロセスを経て、難関と呼ばれる学校に合格していきました。
最初は、本当に学校で落ちこぼれと言われてもしかたない成績をとっていた生徒もいたのです。

子供が「自信を持ったとき」のパワーは無限なのです。

５．脳力～「能力」ではなく「脳」の力について

脳力と言っても、かたい話ではありません。

例えばスポーツにおいてもっとも大事なのは運動神経です。

その運動神経を鍛えるために、筋力トレーニングをしたり、瞬発力をやしなう訓練をしたりするのです。

いくら「技術」ばかり教えても、それを支える「運動神経」とでも言うものが成長していなければ、総合的な技術は向上しません。

勉強でも同じです。

いくら数学の公式や解き方、そして英語の文法の成り立ちなど、技術面ばかりを教えても、子供の学力は向上しません。

「脳」力を鍛えなければならないのです。

それは、**つまり、私達指導者が説明した事を、しっかりと理解する能力**のことです。

同じ問題を１０人の生徒に説明しても、理解度が異なるのは、その「脳」力の差があるからです。

「脳」力がある生徒は、先ほど申しましたとおり、学校の授業を瞬時に自分のものにします。

しかし、まだ十分に「脳」力が鍛え上げられていない子供に、**いくら技術を教えても、それを処理してつかむことができない**のです。

「脳」力を向上させる方法は、いろいろあると思いますが、私は、**音読**を重視しています。音読の効果については、皆様もご存知の通り、その効果が科学的にも証明されています。

音読をしているときの「脳」を調べると、脳のほぼ全てが働いているのです。人間は、普通に勉強しているときは脳の一部分しか使用しないのです。テレビなどを見ているときの脳は、ほんのわずかな部分しか脳を使わないのです。

しかし、音読は、脳の多くの部位を活発に働かせるのです。

それを、私は、塾で長く実践しています。

音読する材料はなんでもいいのです。

小説の冒頭部分の文章でもいいし、英語の文章でも、古文でも構いません。

ある日、数学で満点を取った生徒がいましたので、僕はこう言いました。

「音読したからだね！」

そうすると、子供は、いいます。

「先生、私が満点を取ったのは数学だから、国語の文章を何度も音読したのとは関係ないよ」と。

でも、実際、音読の効果は、数学の力と密接に関わりあっています。

もちろん、数学の勉強をしっかりしたから満点をとったという割合が多いとは思いますが、音読によって「脳」力が向上したととらえてよいと、そのほかの成績向上の例をみて、私は判断しています。

数学の文章問題が苦手な生徒が多いですが、数学の文章問題を解く力は、数学の力というよりも、国語力にかかっているといってもいいのです。
問題の内容をうまくつかめない子供は、なにが書いてあるかが分からないのです。また、その内容をうまく整理できないのです。

そのような面から申しましても、**音読**は、勉強における、「運動神経」を鍛えるとても重要な勉強法であることが言えるのではないでしょうか。

ちなみに、私は漢字ばかりの小説を、幼稚園児や小学生低学年にも音読させます。彼らはまだ頭が柔らかいので、漢字や意味が分からなくても、どんどん吸収します。

また、逆説的に書きますと、不思議なことに、**音読の訓練もあまりしていないのにもかかわらず、成績がいいとされる子供は、音読がとても上手になめらかにできます**。
　その現実から言いましても、音読と学力は、客観的に見ても、つながりがあることがお分かりいただけるでしょう。

　音読はご家庭でも実践できますから、毎日のお子様の家庭学習に取り入れてみてはいかがでしょうか？

　毎日５分の音読が、後々、じわじわと効果となって現れてきます。

６．教える

「教える」という言葉の語源は、「引き出す」ということです。
いくら教えても成績は伸びません。
つまり、「教えるだけ」一辺倒の指導では、子供たちは、特に今の子供たちは学力なかなか伸ばしません。
子供たちの学力を伸ばすには、「引き出す」ことが不可欠です。
子供の持っている能力を「引き出す」手法は、指導者によりさまざまでしょう。
ここでは、私自身の指導の仕方を書きたいと思います。

私は、授業をする上で決めていることがあります。
それは、**授業の最初にみんなに聞くのです。**
「今日何がしたい？」
と。
そして、みんなのしたいのを聞き取り、これまでの授業の流れを考慮して、じゃあ、今日は、こここをしよ

うと決めるのです。

子供たちのしたいものを優先させ、それを行います。

子供たちは、自分が苦手な教科やきらいな分野はそのとき言いませんが、それでいいのです。彼らがしたい教科を聞き、それを授業で私なりに組み立てて指導します。

　授業内容は、彼ら自身が決めたことですから、より積極的に取り組み、「ここはどうしてこうなるか分かる人！」などと問いかけると、**教師が勝手に決めておこなう授業に比べて、はるかにレスポンスがいいのです。**

私は、この章の冒頭に書いた「引き出す」という作業を、このようにとらえ実践しています。私は、あまり説明しないようにします。できるだけ子供たちに考えさせます。

そうすると、子供たちはどんどん自分の意見（適当に答えるのも含めて）を出してきます。そして、それが間違っているものであっても、その考え方を認め、ときには褒めてあげます。

どんなに性格的におとなしい子供でも、自分の考えはいいたいものなのです。そして、間違っていても否定しないという空気をつくっているため、言いやすいのかもしれません。

アメリカではこのようなことは一般的ですが、私は、このような授業展開はとても効果的だと経験的に感じています。

「では、子供たちの好きな教科や分野ばかりしていては、教科や分野によってばらつきがでたり、苦手なところは分からないままになるのではないか」

と思われる方もいるでしょう。

私は、上記のやり方を私に与えられたその日の授業時間の７割を使って行います。

つまり、生徒のしたいところを７割、討論形式で授業を行うのです。

そして、**授業が盛り上がってきたところ**（子供たちは、自分がしたいところができて、自分の意見が自由に発言できることによってモチベーションが上がります）**で**、残り３割の時間を利用して、総合的に考えて、彼らがしなければならない、一般的に子供たちが嫌がるような教科や分野の授業を始めるのです。

　子供たちは、たとえ自分の嫌いで苦手な教科の授業でも、最初に自分たちのしたい勉強を満足いくまでできたという充足感から、納得してくれ、ついてきてくれます。そして、モチベーションが上がった状態で授業を受けることによって、塾に来ていきなり苦手な授業を受けるよりも、はるかに集中して受けることができ、理解をしてくれます。

これを、私は授業における**７対３の法則**と呼んでいます。

授業の７割は、子供たちのしたいこと、そして残り３割で私のしたいことをするのです。

これは、とても「効き目」があります。

もちろん、最初の７割の授業の中でも、彼らがしたいものだけではなく、私がしてほしい、または彼らが定期試験を受ける上で必要なものをさりげなく混ぜますので、全体的にみてもとても充実した授業作りができるのです。

また、授業では、「集中タイム」という時間も設けています。

「集中タイム」とは、一切教えない、自学の時間です。
子供たちは、勉強に対して決して全てにだるいと感じているわけではないのです。むしろ、彼らは、勉強の楽しみ方を覚えたいと思っているし、実際、その集中タイムの中で、その勉強をすることの喜びを感じることができます。
集中している生徒にとって「集中タイム」はあっという間で、気持ちのいいものです。
逆に集中していない子供にとってみては、長く感じてかったるいものになりますが、**不思議なことに、どんなに疲れていても、この集中タイムに集中できない子供は少ないのです**。
そこでは、学校の宿題をしても構いませんし、好きな教科をしても構いません。
その勉強の仕方が悪いとか、こんなところを勉強しても仕方ないと思われる場合でも、一切注意などはしません。
とにかく、彼らが勉強を積極的にしていること自体を受け入れてあげるのです。
彼らは、「授業の時間」と「集中タイムの時間」のバランスが取れているせいもあるかと思いますが、どんどん集中していきいき勉強しています。

例えば、集中タイムを３０分と設定した場合、子供たちは、周りの友達も集中して勉強している空間の中で、自分の選んだ勉強を自分の意志で継続できたことに満足感を覚え、それさえも自信がつく体験のひとつになるのです。
このような集中タイムの実践により、子供たちは「集中力」を養います。
そして、その集中力が身につけば、勉強が面白くなってきますから、家庭学習を少しずつですが、するようになり、その学習にも、より身が入ります。
塾に入塾して間もない生徒達は、集中力を欠くことがありますが、限度を超さない限り注意はあまりしません。
次第に頑張る仲間と自然と同調して、自分も勉強をもくもくはじめるようになるからです。

もし、集中タイムで質問がある場合は、質問に応じます。ですがみんななにしろ集中しているので、**質問することさえも忘れているようです**。

それはある意味いいことなのです。

結局勉強は独りでしなければならないものなのですから。

７．よい土壌

繰り返しになりますが、子供たちを勉強させようと無言の無理強いをするのではなく、彼らに「よい土壌」を与えることに気持ちを注ぎましょう。
野菜でも同じです。栄養たっぷりの肥えた土の中で育った野菜は、実り方が違います。

この章では、本書のまとめとして、その「よい土壌」とはどのようなものなのかを、分かりやすくするために、箇条書きで書きたいと思います。

【よい土壌とは】

1．「自信を持たせ」「やる気を起こさせる」指導者が身近にいること（保護者でも構いません）
2．授業を理解する力である「脳」力を鍛える訓練を欠かさないこと（音読や数独がよい）
3．抽象的な物事を具体的な言葉で説明できる力を身につけるために普段から心がけること（抽象質問）
4．「勉強をしなさい」ではなく、「どのようにしたら、子供が勉強に対し自信を持てるようになるか」を考える（子供の立場にたって考えてみる）
5．子供にさせたいことがあったら、まずは子供の要望を聞いてあげる（いきなり押し付けない）
6．「集中」することの気持ちよさを子供により多く経験させる（家族全員そろっての集中タイムの実践）
7．学力を決めるものは、勉強の量だけではなく、「脳」力×勉強の量であることを保護者が知っている
8．自分の子供に自信を持たせるためには、親が不安でいても仕方がないと知ること（学問に王道なし）
9．目標なくして前進なし。自信がついてきたら、より高い目標を掲げてあげて下さい。（目標の設定）

以上が、おおまかな「よい土壌」の条件です。

私の教え子たちの中で、目を輝かせ勉強を始めた生徒達は、その多くが、上記の「よい土壌」の中で学力を育ませました。

さあ、それでは、善は急げです。

今日から、その「よい土壌」作りに取り組んでみませんか？

すぐにとはいきませんが、地道に土壌作りに励めば、子供たちは必ず芽を出してくれます。

いい芽が育っていくことを祈っています。

8．最後に

現在、熊本では、四高といって難関進学校の受験熱があまりにも過熱しています。

どの塾でも、成績のいい子供を集めることに躍起になって、その合格者数や合格率で、塾のブランド力を構築しようとしているようにも感じられます。

こういう私自身も、難関進学校を目指す生徒に塾に来てもらうことを望んでいます。苦手教科が多い生徒に教えるのと同じように、教えがいがあるからです。

また、お母様方の現在の塾選びのポイントとして、難関高校の合格実績を出していないと、お母様方が心配されるという傾向を肌で感じていますので、苦手教科が多い生徒から、難関高校を目指す生徒まで幅広く合格者をだしておかないと、生徒さんが集まってきてくれないと感じている部分があるからでもあります。

ここでこのような話をする必要はないかとも思いましたが、塾の運営は、そのような難しい側面もあるとい

うことをご理解頂くことも、塾を全体的に理解して頂く上で大事だと思い書かせて頂きました。
　塾が、ただ一生懸命教えていればいいというだけではやっていけない時代になっているのは事実です。

　話を戻しますが、私が、この本を書いている理由は、成績がいい上位２割の子供たちは、誤解を恐れず言えば、ほうっておいても成績を伸ばしていくからあえて今議論をする必要はないと思うのですが、**現在の難関高校受験熱があまりにも高まっている状況において、残り８割の子供達が、なにかしらの形で犠牲になっているのではないかと感じている**からであります。

　片方では、大人たちの期待や見栄に振り回され、さらにもう一方では、塾でついていけてなくても、なにも言えない子供たち。

　私がこの本を書いたのは、**その８割の子供たちがいかにしたらより適切な指導を受けられるか、そして自信を持てるようになり、さらには家庭学習ができるようになるか**を、皆様と一緒に考えるきっかけにしたいと思ったからです。

前著「子供に勉強は教えるな」にも書きましたが、「勉強しなさい」の日常を一旦やめて、子供たちを、自由な海に放ってあげてください。子供たちはとてもいきいきして泳ぎだすはずです。

　そして、より多くの子供たちが、**適切な土壌が整っている環境で勉強をさせ、小さな困難を乗り越えることにより、ひとつひとつ成功体験を積み、やる気をだし、埋もれている可能性が引き出され、勉強の面白さが分かり家庭学習をするようになり、最終的に成績を向上させること**ができることを祈っています。

　最後に、優喜塾に通って下さっている皆様におきましては、心より感謝しています。まだまだ私自身、指導するものとして勉強中の身でありますが、皆様のご意見を定期的にお聞きしながら、勉強が得意な生徒にも、苦手な生徒にとっても、学習をする上で、優喜塾がよりよい土壌になるように励んで参りたいと思っております。特に勉強が苦手なお子様に、私は出会いたいと思っています。

最後に一言

余計なものはなくても、よく肥えた土（環境）と日光（目標）があれば植物は育ちます。
ただし、水（褒める言葉）をやるのを忘れずに。
しばらくまっていれば、そのうち花（結果）が咲きます。

文責　中川祐樹
優喜塾（０９６－２４８－０１９０）
www.yukijyuku.com　（『優喜塾』で検索してください）